昭和四十二年度
修士課程共同研究

地名調査研究の小報告

――広島県佐伯郡旧五日市町について――

江端義夫
来田隆
早川勝広

目次

○ はじめに
一 調査地と調査研究方法
二 地名事象の解釈
三 地名事象分布状況
四 旧五日市町地名の諸特色
○ おわりに

本稿は、藤原与一先生のご指導のもとに、「方言地理学」修士課程講義演習の一こまとしてとり行なわれた、広島県佐伯郡旧五日市町の地名の共同調査に関する小報告である。

○ はじめに

地名研究の広がりは、どのように見定められようか。

私どもは、まず、実習の精神を堅持する態度で、地名調査研究に臨むこととした。実地調査の過程で、諸問題をみつけ、地名研究の発展性や地名そのもののおもしろさをみいだしてゆこうとしたのである。

藤原与一先生は、講義演習において、〃地名学的想念〃を語られた。それは次のようである。

a命名の心理（命名社会学、発想と社会）
b漢語地名と和語地名（どういうときに漢語地名が要請されてくるのか）
c地名伝説の発生と伝承
d細分地名の要・不要
e都市周辺の地名と山村などの地名
e'地名と人間世代
f新しい地名の記録と整頓

これらに啓発されて、考えを深めるところも、私どもの、地名調査研究の演習の段階での課題であった。どのような手順をへて実習が行なわれたかを記述すれば、実習の意図はくんでいただけよう。

一 調査地と調査研究方法

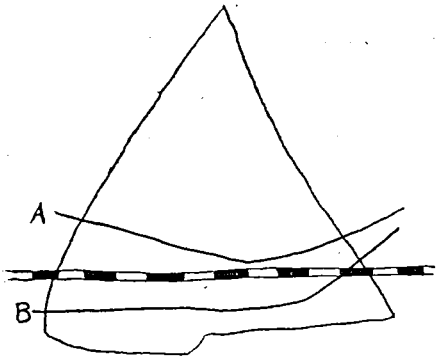
(一)調査地の概況

(1)地理的事情

調査地は、広島県佐伯郡五日市町のうち、旧五日市町（大字五日市、海老塩浜、皆賀）にあたる地域である。（ただし、海老塩浜の三筋川以西は除外した。）面積は約五平方キロメートルで、東、北、西は山にかこまれ、南は瀬戸内海に面した平野地で、八幡川、三筋川にはさまれた肥沃の地である。もとは、農業を中心に（海岸部では塩業）営んでいたが、現在は宅地造成が進み、住宅地に変わりつつある。人口は約一万五千人（三十七年現在）である。

(2)旧五日市町の沿革

村落の発生は、鎌倉中期といわれ、江戸時代に入って、五日市村、海老塩浜村、皆賀村と呼ばれるようになった。明治四十四年に、五海市村を五日市町に改めた。すなわち旧五日市町である。昭和三十年に、観音村、八幡村、石内村、河内村を合併し、現在の五日市町に到っている。



土地形成は、八幡川の沖積堆積物と、数十回にのぼる開拓と埋め立てによるものである。A（長池、東田）以北は、江戸時代の初期以前に開墾され、A～B（大新開、蟹原）は、江戸中期の一連の新開（海老塩浜、カニハラ新開、亥新開、町裏新田、湯盛新田、鬼ケ首新開、二階新開）によっている。B以南は、明治以降の開拓、埋めたてによるものである。

(二)調査研究の作業手順

(イ)準備

調査研究の準備作業として、代表二名（沼本克明、江端義夫）が、五日市町役場から土地台帳などの参考資料を拝借し、調査分担（二名一組、全七班）を決めた。各班の調査担当区域が整理され、調査の方法について、次のように、全体の意志統一を図った。①土地はえぬきの古老を中心に聴録する。②地名とその指示する区域とを確認する。③地名は、大字、小字から田の名や俗称に到るまで、可能な限り採集する。④聴取した地名は、カードにカタカナで表記する。（一枚一地名）⑤地名に関する伝承も聴録する。

(ロ)実地調査と整理

(1)第一回実地調査（昭和四十二年六月二十二日）

調査準備に従って、全員がそろって調査地へ出発した。調査時間を限り、調査後、全員が藤原与一先生宅に集合し、初めての地名調査の体験を話しあった。被調査者に関しては、(イ)心のふれあいの楽しみ、(ロ)適確な被調査者の発見のむつかしさ、(ハ)土地人の地名への感情などについて語られた。調査に関しては、(イ)地名と位置・区域との不照合、(ロ)地名の転訛形などの問題が指摘された。

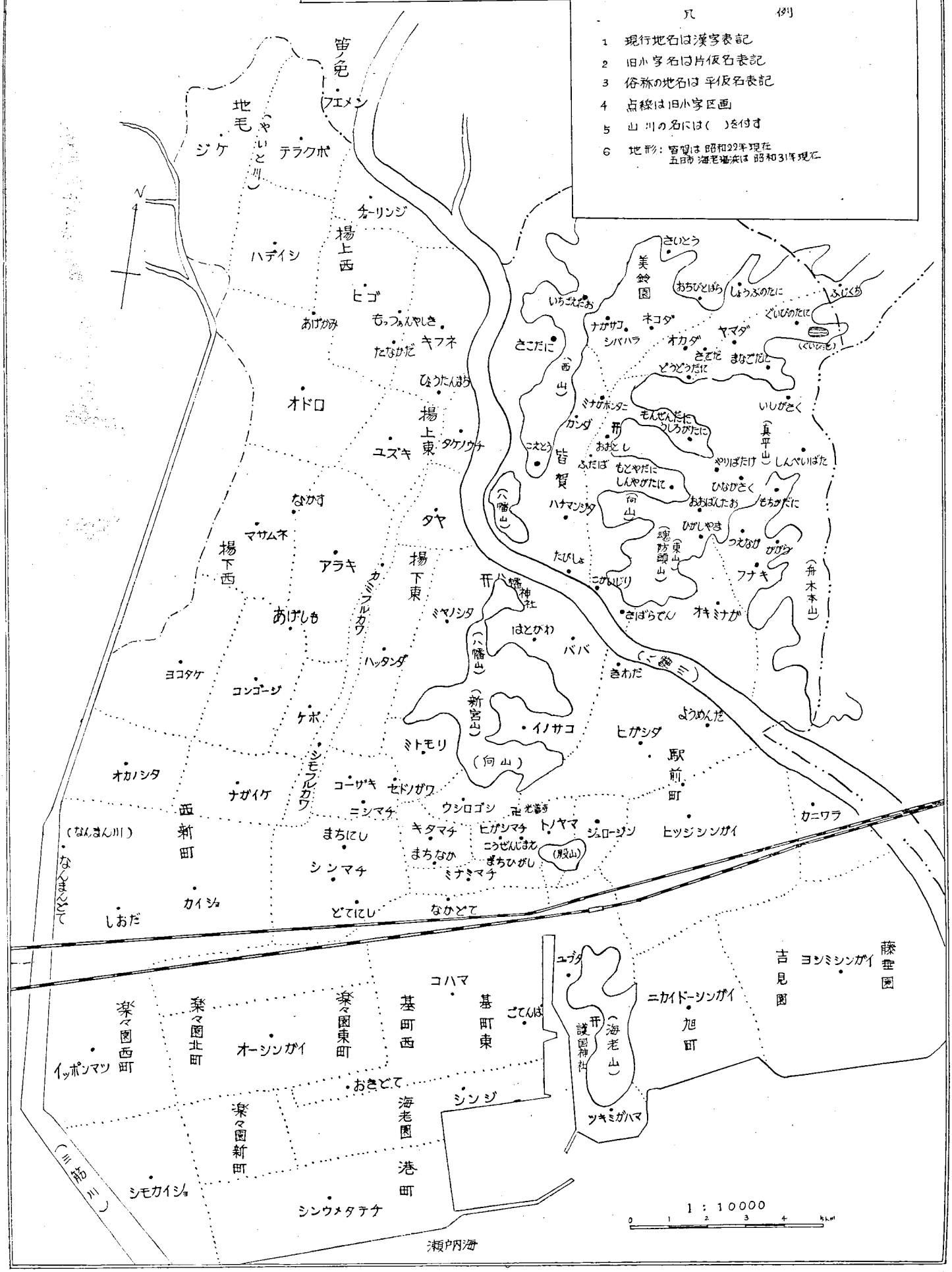
(2)第一次整理（六月二十九日）

各班で調査した地名を集め検討して、旧五日市町地名総覧作成のための準備をした。この段階で、位置の不明瞭なもの、未調査区域などを点検した。そして、地名の印象的解釈を試みた。

図1 地名総覧

凡例

1 現行地名は漢字表記
2 旧小字名は片仮名表記
3 俗称の地名は平仮名表記
4 点線は旧小字区画
5 山川の名には( )を付す
6 地形：皆賀は昭和22年現在
五日市 海老山は 昭和31年現在



(3)第二回実地調査

第一回実地調査資料の確認・補充を各班において、随時に行なった。

(4)第二次整理（七月六日）

聴録しえた地名事象に解釈を施して、地名の分類案を各班ごとに提出した。㋑語構成に注目したもの、㋺命名の動機（心理）に注目したもの、㋩歴史性に注目したもの、などがおおかたの分類案であった。

(ハ)地名事象の解釈と地名事象分布図作成

(1)第三次整理（九月十四日）

地名事象の地図化の第一次作業として地名総覧を作った。各班ごとに七葉の地名総覧を作った。これらをあわせれば、ここに、旧五日市町の地名総覧ができるわけである。

(2)第四次整理（九月二十八日）

地名事象の地図化の第二次作業は、代表者二名（沼本克明、江端義夫）によって、第二次整理の分類案に従って、地名事象分布図を作った。そして、全員でその解釈を試みた。

以上が、演習における地名調査研究の作業の概略である。

(二)まとめ作業

(1)第三回実地調査（十月十三日）

第五回日本方言研究会に、演習の作業結果を展示することになり、代表者三名（来田隆、早川勝広、福永博）が、三回目の実地調査を行なった。演習の時間に提示された、地命事象分布図を再検討し、(1)地理、占居・開墾、区画にもとづく地名分布図、(2)音読み、訓読みにもとづく地名分布図、の二葉を作った。

(2)第四回実地調査（昭和四十四年一月十九日）

この稿を成すにあたって、四回目の実地調査を代表者三名（江端義夫、来田隆、早川勝広）が行なった。

二　地名事象の解釈

採集しえた地名は、地名総覧（図1参照）として掲げたとおりである。俗称、旧字名、現行地名、山、川、池の名をあわせて、総数百五十三地名である。これらの地名のうち、俗称、旧字名を、土地の状況、土地人の説明、文献（注）に徴して解釈し、さらに、分類をした。この際、分類基準は、柳田国男氏の「地名の研究」、国語学辞典の地名の項（大藤時彦氏）、鏡味完二氏の「日本の地名」等の所説を参考にして、分類した。すなわち、(一)利用地名、(二)占有地名、(三)分割地名の三分類とした。(一)は、人が土地を利用する必要上からつけたもので、地形、地質、地物にもとづくものが多く、原始的経済生活上、命名された地名である。(二)は、土地利用が進んで、一族、個人が土地を占有するためにつけた地名で、土地開墾、信仰生活にもとづいて命名された地名である。(三)は、土地を分割し、利用占有する必要にもとづくものであり、方位、上中下、新古などによって命名された地名である。地名の発生は、(一)が最も古く、(二)がそれに続き、(三)が最も新しいと考えられよう。

以下、この分類基準によって、採集した地名を分類する。意味不明の地名も多いが、それらは、以下の三分類にはいらぬ地名、現行地名、山、川、池の名とともに、後に掲げる。地名はカタカナで書き、漢字表記の確かめられたものは、それをカッコに入れて示す。

(一)利用地名

(1)地形にもとづくもの

ツエナガ（ツエ長）　谷の奥まった所であって、山の裾に位置する平地である。当地方で、土砂の崩壊することを「ツエル」または「ズエル」という。この地も、ちようど、山崩れによってできたと思われる地形である。

コガイジリ、または、オンガワジリ　皆賀川が八幡川に注ぎこむあたりの地である。皆賀川は、幅一メートルの小川である。コガイジリはコガワジリ（小川尻）の、オンガワジリは、オガワジリの訛りであろう。

キワダ　八幡川の堤の際にある地名である。これと同種の地名に、ヤマダ（山田）、オカダ（岡田）、ネコダ（猫田）がある。

以上の他に、地形にもとづく地名であると認められるものは、次のとおりである。テラクボ（寺久保）、ハデイシ（波出石）、ナカス（中洲）、ナガイケ（長池）、サコダ（迫田）、シバハラ（芝原）、フジクチ、コーザキ（幸崎）、ナガサコ（長迫）、セドノガワ（瀬戸川）、ババ（馬場）、トノヤマ（殿山）

(2)地質にもとづくもの

ガガラ　地の人の説明では、山の傾斜面を「ガガラ」というのであって、「河河原」と書く、とのことである。「藝藩通志」には、「鶴々羅」と表記されている。当地は、谷がひときわ高くなった所であり、開墾初期には石地であったと解しうる状況である。「全国方言辞典」によると、島根県都野津で、「石地」の意味で「ガガラ」という。傍証となろう。

マサゴダニ、または、マナコダニ（真砂谷）　砂地の谷の意であろう。

オドロ（悪泥）　地の人の説明では、この土地付近は、昔、海であった所で、陸地になった後も、沼地であった。明治になっても湿地帯で、ぬかるんでいた、とのことである。現在は、宅地になっている。「全国方言辞典」に、雑草、いばらの茂った場所を「オドロ」というとあり、あわせて理解しうる。

イノサコ、イノサク、または、ユノサゴ（湯砂）地の人の意識としては、ユノサゴが正しい地名であるようである。現在は、イノサコと呼びならわされている。山が近くに迫っていて、その間の小さな平地である。このような状況の土地を「サコ」ということは、「全国方言辞典」で確められる。また、この地には、降雪時にも雪の積もることのない泉が湧いていた、と伝えられている。かつて、ボーリングも試みられている。「ユ」は「湯」と解され、「イノサコ、イノサク」は「ユノサコ」の訛りであろうと思われる。

以上の他に地質にもとづくものとして、サコダニ（迫谷）、イシガサク（石ケ柵）、ショーブノタニ、シオダ（塩田）がある。

(3)地利・地物にもとづくもの

フダバ（札場）　オートシ（大歳）神社の巡拝者が、参詣の証として札を受ける霊所のあった所だ、と地の人は伝えている。現在は田地である。

オーバンタオ（大番峠）　皆賀の人の先祖で、昔、大番役をつとめた者がいた。それに因んでつけた地名である、と地の人は説いている。

コエトー（越峠）　西山と八幡山との間の、低まった所の峠である。峠を越えるという意と解される。

イチゴエタオ　皆賀から、この峠を通って北西の中地へ出る。現在は切りひらかれて宅地となり、ミスズエン（美鈴園）と名づけら

れている。

ウシロゴシ（後越）　この地は、山陽道であり、新宮山を越えて、イノサクへ出た。この地では、北を「ウシロ」という。

グイビノタニ　この土地の俚言では、グミ（胡頽）のことを「グイビ」という。グイビの生えている谷の意であろう。

以上の他に、地利にもとづくものは、モチガタニ、イッポンマツ（一本松）がある。

㈡占有地名

(1)占居にもとづくもの

ハッタンダ（八反田）　八反を一区とする田の意である。

カンダ（神田）　八幡神社の社領であった土地である。八幡神社の近辺の地であり、信仰生活と地名との結びつきが注目される。

タビショ（旅所）　八幡神社から百メートルほどのところにある土地である。地の人は、かつて、八幡山の頂から、御輿をかつぎおろして、八幡川辺で祭礼を行なっていた。その場所をさして「タビショ」とも「オタビショ」ともいう、と説く。「オタビショ」が神幸にあたって、仮に神霊を奉安する場所をさすことばであることは、「民俗学辞典」に詳しい。前の、カンダと同じく、信仰生活と地名との結びつきが、みられる。以下、同類の地名を掲げる。チョーリンジ（長林寺）、コンゴージ（金剛寺）、キフネ（木船）（木船神社のあった土地）、オートシ（大歳神社のあった土地）

モッツァンヤシキ　特殊な職人などの住んでいた土地を、何々屋敷ということは、「地名の研究」に説かれている。これと同じ命名法によるものであろう。

ジケ（寺家、または、地毛）　地の人は、池田城のまわりには寺が多かったので、この地名が生まれ、本来は「寺家」と書くのだと説く。「日本地名小辞典」に「ジゲ（寺家、寺下、寺上、時花、自花、地下）、自己の部落」とある。地の人の解釈は、「寺家」という漢字表記に引かれて生まれたものであろう。

以上の他に、占有にもとづくものとして、次のものがある。モトヤダニ（本屋谷）、シンヤガタニ（真谷ケ谷）、シンペーバタ（真平畑、真兵衛畑）、オチビトバラ（落人原）、モンゼンダニ（門前谷）、フエメン（笛免）、タナカダ（田中田）、ヨーメンダ（用免田）

(2)開墾にもとづくもの

アラキ（荒木）　この土地は開墾地であり、「日本地名小辞典」に「アラキ（荒木、荒城、安楽城、荒木田、榿代）、開墾地」とあることと一致する。

カイショ（開所）　シンジの項参照。

ヨシミシンガイ（吉見新開）　吉見新兵衛という人が、明治初年に開墾した土地。新開には、この他に、ニカイドーシンガイ（二階堂新開）、ヒツジシンガイ（未新開）、カニワラ（「カニ原新開」の略形）、オーシンガイ（大新開）がある。

シンジ（新地）　昭和初年の埋め立て地。カイショ、シンガイ、シンジの順は、その土地が開かれた時代の順であり、開墾地の地名の命名法に、時代的な相違が認められる。

以上の他に、開墾にもとづくものと認められるものに、シモカイショ（下開所）、シンウメタテチ（新埋立地）、ツキミガハマ（月見ケ浜）がある。

㈢分割地名

(1)方位によるもの

説明を略して、以下、列挙する。キタマチ（北町）、ヒガシマチ（東町）、ミナミマチ（南町）、ニシマチ（西町）、マチヒガシ（町東）、マチニシ（町西）、マチナカ（町中）、ヒガシダ（東田）、ドテニシ、ヒガシヤマ（東山）

(2)上中下によるもの

カミフルカワ（上古川）

シモフルカワ（下古川）　現在の八幡川は、もとは、チョーリンジ（長林寺）あたりから、この二つの地を通って流れていたのである。そのなごりで、この地は現在でも、土地が少し低く、石が多い。

ミヤノシタ（宮ノ下）

ハチマンジタ（八幡下）　この二つの地は、八幡神社の下にある。

オキミナガ（沖皆賀）　上中下に類するものとしてあげる。当地では、海側の土地を「オキ」といい、その反対の地を「アゲ（揚）」という。オキミナガは、皆賀の南部、海側の地である。同類に、オキドテがある。

以上の他にアゲカミ（揚上）、アゲシモ（揚下）、ナカドテがある。

(3)新古によるもの

シンマチ（新町）

コハマ（古浜）

以上の他に、分割地名と認められるものを次に列挙する。ミナガホンタニ（皆賀本谷）、タケノウチ、タケチ、または、タケンチ（竹内）、ヨコタケ（横竹）、オカノシタ（岡ノ下）、ウシロガタニ（後ケ谷）、コーゼンジマエ（光善寺前）

次に、三分類にはいらない地名、解釈のできなかった地名、現行地名、山、川、池の名を掲げる。

◎三分類にはいらない地名

ゴテンバ（御殿場）　当地の羽田氏が大正年間に、塩田であったこの地を買い取って、海水浴場にして命名した地名である。

ジュロージン（寿老神、寿老人）、または、ジュロージ（寿老地）　地の人は、ジュロージンという。ジュロージは、戦後の土地台帳作成時に、作成者の解釈で「寿老地」という字をあてたためにできた地名である。この地で、昔、寿老神の絵を描いた藩札が見つかったと、地の人はいい伝えている。

◎解釈できなかった地名

ユブタ（湯蓋）　地の人の説くところは、五百年前に、湯蓋道空という人が住んでいたことから、この名ができたとも、昔、湯が湧いていた土地であるためにできた地名であるともいう、とのことである。

以下は、説明を略して列挙する。ユズキ（柚木）、マサムネ（正宗）、ヒゴ（肥後）、タヤ（田谷）、ケボ（毛保）、サイトー、ドードーダニ、サバラセン、または、サバラデン（散原線）、ヤリバタケ、ヒナガサク（火縄ケ柵）、モチガダニ（餅ケ谷）、ミトモリ（御戸森）、ヒョータンマチ、フナキ（舟木）、ハトガワ（鳩川）、ナンマンドテ

◎現行地名

ジゲ（地毛）、フエノメン（笛ノ免）、アゲカミニシ（揚上西）、アゲカミヒガシ（揚上東）、アゲシモニシ（揚下西）、アゲシモヒガシ（揚下東）、ニシシンマチ（西新町）、ヒガシマチ（東町）、

エキマエチョー（駅前町）、ミスズエン（美鈴園）、ミナガ（皆賀）、トースイエン（藤垂園）、ヨシミエン（吉見園）、アサヒマチ（旭町）、モトマチヒガシ（基町東）、モトマチニシ（基町西）、カイローエン（海老園）、ラクラクエンヒガシマチ（楽々園東町）、ラクラクエンキタマチ（楽々園北町）、ラクラクエンニシマチ（楽々園西町）、ラクラクエンシンマチ（楽々園新町）、ミナトマチ（港町）

◎山、川、池の名（現存しないものには※印を付す）

ニシヤマ（西山）、シンペーヤマ（真平山）、ヒガシヤマ（東山）、ムカイヤマ、または、ムコーヤマ（向山）、コンボーズヤマ（魂防頭山）、フナキモトヤマ（舟木本山）、ハチマンヤマ（八幡山）、ハチマンヤマ（八幡山）、シングーザン、または、シングーヤマ（新宮山）、ムコーヤマ（向山）、※カメヤマ（亀山）、※ジョーネンヤマ、トノヤマ（殿山）、カイローヤマ（海老山）

ミナガガワ（皆賀川）、ヤワタガワ（八幡川）、ミスジガワ（三筋川）、ヤイトガワ、ナンマンガワ、

グイビイケ、※シバハライケ（芝原池）、※ガガラノイケ

以上、地名事象ひとつひとつの解釈を試みた。

次に、土地の歴史的推移とみあわせて、地名事象分布図の解釈を行なう。諸観点からみた地名のうち、二葉の分布図を選んでとりあげることとした。一つは「利用、占有、分割にもとづく地名」の分布図である。（図2参照）これは、土地形成過程に一典型を示す旧五日市町、すなわち、三角洲地帯の五日市村、埋め立てによって造成された海老塩浜村、山間地の皆賀村について、人々がいかに土地と闘い、土地を愛し、土地に執着してきたか、などをみてゆくものである。二つは「和語、漢語からみた地名」の分布図である。（図3参照）明治以降、大正、昭和期にできた土地の地名と、それ以前の土地の地名とを比較して、和語地名、漢語地名の観点から分布傾向をみてゆく。このほかに、「音節数からみた地名」の分布図がある。（この分布図は挙げない。）地理的事情や居住地の新古によって、音節数にかたよりがみられはしないかが注目されるのである。これらの実際に関しては、次節で扱うこととする。

（注）参考文献は、次のとおりである。

1、柳田国男「地名の研究」（筑摩書房、定本柳田国男集第二十巻所収）
2、吉田東伍「大日本地名辞典」
3、鏡味完二「日本の地名」ならびに、本書巻末「地名小辞典」
4、東条操編「全国方言辞典」「分類方言辞典」
5、柳田国男監修「民俗学辞典」
6、「藝藩通志」

三　地名事象分布状況

地名が、土地と人間との交渉において発生するとすれば、地名分布図に認められる分布は、両者の錯綜した現象の歴史的現実態として、層序的にとらえることができよう。以下三分類法にもとづいて、地名分布の解釈を試みる。

㈠「利用、占有、分割にもとづく地名」の分布

(1) 利用地名

地名総覧にみえる揚下・揚上・町東・町西・水長の各部落は、すでに正安二年（一三〇一年）ごろには聚落をなしていた。当時は、八幡川は長林寺、竹内あたりから南へ流れていた。五日市村は低湿地帯にあり、一七世紀後半開拓された海老塩浜は、海に突出する位置にあった。かつて、水長（今の皆賀地域）は、水はけの悪さに苦しんだという。一七世紀中ばに八幡川の水路変更の工事が行なわれて、現在の形をとると、この地域一円の水の便は良くなり、しだいに開発が進んでいった。

原始的経済生活の原初をうかがわせる地名は、多く、地形、地質、地利にもとづいて認められる。皆賀では自然のさまをみて、ヤマダ（山田）、オカダ（岡田）、ナガサコ（長迫）、サコダニ（迫谷）、シバハラ（芝原）、ツエナガなどと名づけている。五日市の平坦地では、テラクボ（寺久保）、ナカス（中洲）、オドロ（悪泥）、ナガイケ（長池）、シオダ（塩田）などの地形、地質による地名がみられ、旧八幡川（今の上古川・下古川）と平行して南北にたどられる。八幡川沿いの地名、キワダ、コガイジリ（小川尻）は、川との関係が深い。地利にもとづく地名は、交通のためのイチゴエダオ、コエトー（越峠）が、皆賀地域にみられる。グイビノタニ、フダバ（札場）も、やはり、皆賀にみられる。わずかに海老塩浜地域でイッポンマツ（一本松）がみられ、五日市の町中で新宮山の麓に、ウシロゴシ（後越）がみられるだけである。

地形、地質、地利にもとづく地名の分布は、ほぼ分布地域を同じくして、主に北部域にみ出されがちである。一方、山陽本線、国道以南にはほとんどみ出しがたいということが、特色である。

(2)占有地名

土地利用が進むにつれて、個人、集団によって開墾が行なわれる。そこで自他の土地を区別する必要が起こり、積極的に占有の地名を与えていったであろう。開墾をなしうるのは権勢ある寺社、豪族がまず考えられる。チョーリンジ（長林寺）、キフネ（木船）、コンゴージ（金剛寺）、カンダ（神田）、ハッタンダ（八反田）、などはその例である。小集団または個人占有の地名もみられ、オチビトバラ（落人原）、シンヤガタニ（真屋ケ谷）などが認められる。これら占有を主とする地名が、当該地域の中北部にかたよりをみせて、分布していることが注目される。他方に、明治・大正・昭和期の開墾によって造成された南部海岸地域では、「何々新開」「何々開所」などに代表される新開墾地名が著しい。さきの占有地名の分布と対応して考えるとき、南北に分画して認められる分布の事実は、興味深い。

(3)分割地名

最も新しい命名である。分布は、おおむね繁華な町中か、山間よりは谷口に見出される。五日市町中心部の地名は、方向、方位にもとづく地名が多いようである。方向、方位に次いで多いのは上中下の区分けである。これらの地名は平野中央部を覆って分布しているとみられる。

以上、分布を通して土地と地名との関わりをみてきた。地名の命名の由来には、生活事情万般が関係しているとみられる。しかし、現行地名ないしは、最近の地名は、土地と離れた別の観点で命名されるようである。これについては、後にふれるところがある。

(2)「和語、漢語からみた地名」の分布

分布図をみると、いわゆる漢語地名の分布の粗であることに気付

く。昭和期に造成された土地では、カイショ（開所）、シンジ（新地）、などがみ出される。これより古い時期の地名として、チョーリンジ（長林寺）、ヒゴ（肥後）、コンゴージ（金剛寺）、などを挙げることができる。

和語地名の分布は全域にたどられるが、南部海岸地方は、やや粗である。

和漢混交地名は、和語地名、漢語地名の分布の目を縫うように全域に認められるが、概して、新開地に多い。これは、次の音節数との関わりにもよるのであろうか。

㈢「音節数からみた地名」の分布

地名を二字にするという因習は、昔のことである。こんにちは、字数の多い地名も用いるようになっている。したがって、分布図に、音節数の多少による分布差がみられてよかろう。分布図をみると、一音節地名は皆無であり、二音節地名はわずかに、ジケ（地家）、ヒゴ（肥後）、タヤ（田谷）、ババ（馬場）、ケボ（毛保）の五例であるが、これらの地名の由来について土地人は答えられなくなっている。数量的に最も多い三、四、五音節地名の分布は、中北部域のいくぶん古い地域にも、新しい地域にも認められる。

漢字表記の面からみると、二字による表記の地名がなかでも多く、次いで三字の地名が多い。四字の地名になるとはるかに少なくなる。現行地名はひとまず除外したが、新開地の現行地名を補えば、南部海岸地方に字数の多い地名が分布しがちである。

四　旧五日市町地名の諸特色

このたびの演習によって注目された旧五日市町地名の特色を、粗描することにする。

㈠地名伝説の発生

地名伝説は、多く土地の利用と開墾、占有と結びついて発生しやすく、分割地名とは縁遠いようである。利用、占有地名の分布の密な皆賀は、地名伝説も豊富である。開墾初期の抗争と定着のようすを、平家一族の盛衰と関係づけた、一連の伝説を伝えている。この話に関連する地名は次のごとく挙げられる。オチビトバラ（平家の落人の住みついた所だという。）、モトヤダニ、シンヤガダニ（皆賀に最初に居住した個人または集団の屋号）、シンペーヤマ、シンペーバタ（真の平家所有の地を意味するとのこと。）、ショーブノタニ、ヤリバタケ、ヒナガサク、イシガサク、サバラデン（ともに合戦に起因する地名だという。）、コンボーズヤマ（皆賀の祖先が、魂をもって敵と対することを誓った山だという。）これらは、かならずしも正しいとは言えないであろう。信憑性の問題ではなく、かかる伝説が皆賀に生まれたことがおもしろいのである。

㈡地名伝説の変容、

地名伝説は、種々の事情によって変容し、あるものは消滅してゆく。変容現象の原因の一つに宛字の問題がある。民間でよびならわしていた地名に漢字があてがわれると、人々は漢字をみて、新たな伝説を生み出すか、またはもとの伝説を変容させていったであろう。先に事象解釈で説いたジュロージン（寿老神、寿老人）からジュロージ（寿老地）への変化にもとづく話、ミナガ（水長）が旧八幡川の水路改変により皆よろこんだところからミナガ（皆賀）と改称した話は、その例である。これに類するものにユブタ（湯蓋）、ジケ（寺家、地下）などが挙げられよう。二つに、世代の交代およ

び地理的事情の変化につれて、地名伝説の内容がしだいに変容していくことがある。コガワジリ（小川尻）の音転によるコガイジリを、中年男子は、かって小貝のよく採取できた川辺をいうのであろう、と説いた。老年者の説くところと、すでに差をみせている。「コガイ」と聞いて、すなわち「小貝」と結びつけけてゆく。まことに自在である。

㈢新地名の命名態度

時代を遡れば遡るほど、土地の事情を地名に生かしている。これは、日常生活が常に土地の自然状況に左右されていたことを思わせる。時代を下るにつれて、土地人は土地の形状をとらえての命名よりも、人為的に名を与える傾向を示すようになる。現行地名では分割地名を主とし、土地在住者以外の人々にもすぐに理解できる画一的なものになってきている。たとえば、楽々園東町、楽々園西町、楽々園新町、楽々園北町であり、揚上東と揚上西、揚下東と揚下西などである。

また、かって、ヨシミシンガイ（吉見新開）、ニカイドーシンガイ（二階堂新開）、オーシンガイ（大新開）、と言っていた地域は、こんにち、吉見園、旭町、楽々園東町と言っている。皆賀地域のヤマダ（山田）、オカダ（岡田）、ネコダ（猫田）、シバハラ（芝原）は、西山開墾によって埋め立てられ、美鈴園となっている。「何々園」に収約される開墾地名には、概して分割地名とは別種の、美称を求める意識が働いているとみられる。

これら新しい地名は、土地の様相そのものをみてとった命名よりはむしろ、自然を征服し活用してゆくための、人為的な命名によっている。

㈣そのほかのこと

俗称に関しては、調査を深めることによって、さらに貴重な多くの地名を採集することができるであろう。調査地域を広げてゆけば、解釈保留の地名も理解されよう。

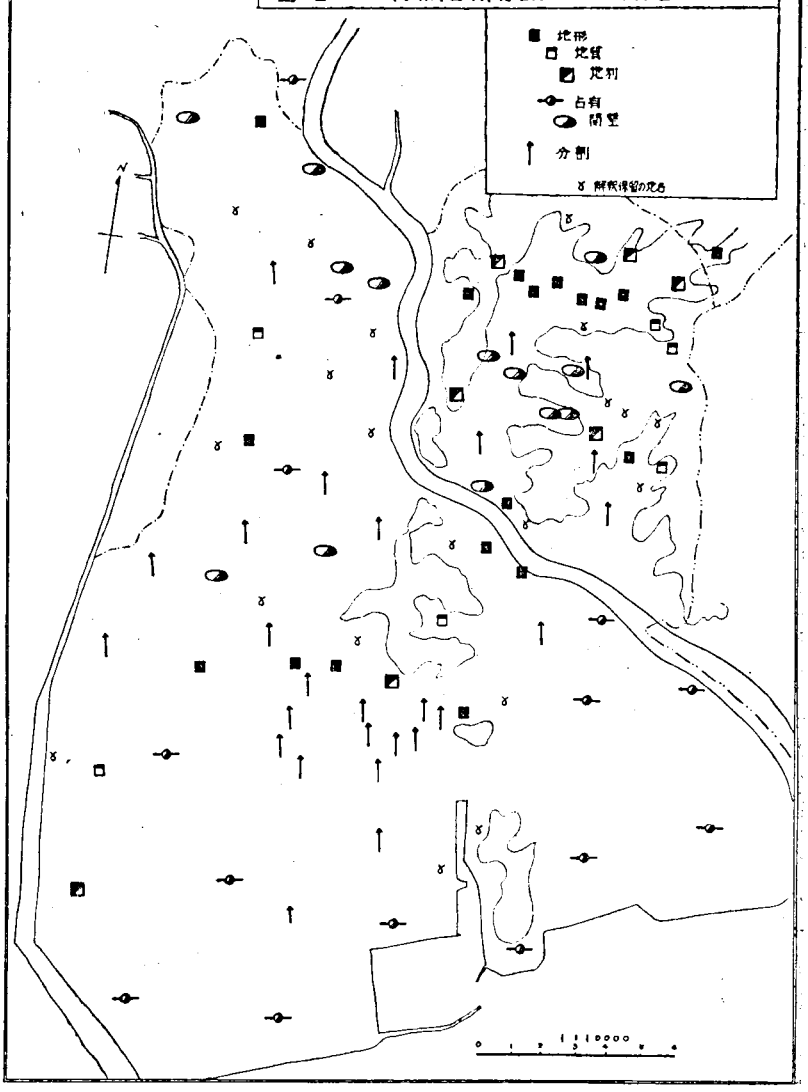
○おわりに

以上が「方言地理学」講義演習の、ごく小部分としてとり行なわれた地名調査研究のまとめである。私どもは、演習の立場で、自由に地名研究の諸問題を考えようとした。資料の取り扱いの粗漏さにも拘らず言いすぎたふしも多かろう。御叱正いただければ幸である。

地名調査に参加したものは次のとおりである。岩崎文人、江端義夫、来田隆、木村東吉、斎木泰孝、菅原敬三、田辺健二、徳田瑞穂、沼本克明、早川勝広、福永博、真砂茂美、山崎宏暉、岡野信子（聴講生）。

（一九六九・二・二〇）

図 2　利用、占有、分割にもとづく地名



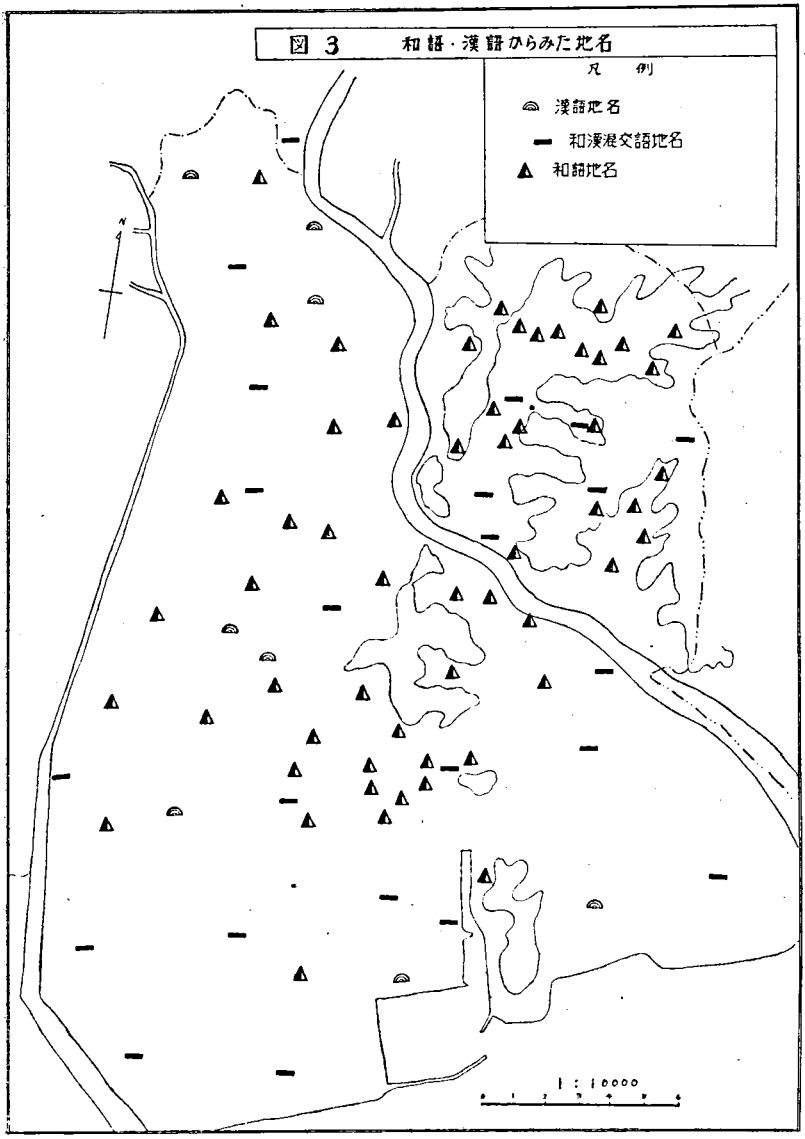


図 3 和語・漢語ひらみた地名
凡例
漢語地名
和漢混交語地名
和語地名
N
1 : 10000